

■しまゆむた

奄美ですすむ鹿児島大学との連携

花井 恒三（奄美市企画部長・前奄美群島広域事務組合事務局長）

<はじめに>

5年前、奄美群島振興開発特別措置法（奄振法）の延長議論していた頃、地元の南海日々新聞に「奄振・法延長と奄美振興～地元からの提言～」とのタイトルで群島内各界のインタビュー記事が連載された。私へのインタビューは「自立」へ向けたキーワードは？であった。私は、「選択と集中、それに大学が自己改革によって生き延びようとしている様に学ばば奄振も市町村合併もよく見える。」と述べたところ、新聞の見出しは「奄美（奄振）は沖縄（沖振）と離島（離振）の中間的存在、大学の自己改革に学べ」となっていた。当時の私の関心は早稲田大学のアジア重視路線と遠隔教育（マルチメディアキャンパス）や慶応大学湘南藤沢キャンパスのプロジェクト・クラスター戦略に関心を持ち、関係図書を買ひ、市町村合併や行政改革のヒントを求めていた。最近では、立命館大学の経営と研究の融合、首都大学の動きなどに着目している。

加えて、只今、私の手もとには先日購入した月刊「論座」の国立大学改革特集記事がある。

このようななか、私は、名桜大学と鹿児島大学双方の「大学と地域の連携」を標榜する動きに出会う機会を得た。双方の共通点は、これまでは大学と地域の誰某という個人的つながりを中心に展開されてきた研究活動が、大学対自治体という、組織対組織の連携に大きく変化・前進してきたことであった。

私の乏しい近年の経験に基づくレポートとなるが以下、私の感想を述べてみたい。

<名桜大学 10 周年記念式典>

鹿児島県は沖縄県、宮崎県、熊本県との県際交流をすすめており、奄美群島は沖縄県とのそれを担っている。鹿児島県の南際の奄美群島と沖縄県の北際のやんばる圏域が交流することによって奄美・やんばる圏域が両県交流の中心軸を担う、との主旨である。

やんばる圏域は、IT 特区、金融特区、ウエルネス産業などの拠点であると共に、只今、普天間移設問題で注目が集まっている辺野古地区はじめ米軍基地を多くかかえている一方、国の野生生物保護センターが立地し、奄美と共に世界自然遺産登録候補の資源を共有するやんばるの深い森を保有している。また、人材育成分野では、名桜大学、国立沖縄工業高等専門学校が立地し、まもなく、世界最高水準の、沖縄科学技術大学院大学の整備が国によって着手される。名桜大や国立高専へは奄美からの学生も増えつつある。さらに、先進7か国サミット施設や海洋博施設の活用、プロ野球等のスポーツやキャンプ、ロングスティや体験修学旅行などの拠点形成がすすんでおり、北山王朝時代はじめ、奄美との人的歴史や産業交流などの地理的環境ももともと近い位置にあり、交流の意義は大なるものがある。

このような交流の下、一昨年は名桜大学 10 周年記念式典が開かれ、私も出席の機会を得た。名桜大学は公設（名護市）民営で高名な大学で、記念講演は地元出身で EM 菌研究・開発で名高い琉球大学教授の比嘉照夫氏であった。比嘉氏は、三位一体改革をチャンスに、教育、医療、農業を国から地方へ取り上げ、地方の知恵と競争力を高めようと呼びか

けられ、名桜大のこれからの生き方について、「大学教官と地域の共同研究で大学は地域のコンサルタントたれ。」と強調された。

ふり返ってみると、私の学生時代は、象牙の塔たる大学に産学共同の理念が導入され、その功罪をめぐって論争が行われていた時代であった。その後、産学共同から産官学共同へ、地域・産官学連携へと、地域と大学の連携が重要視される時代に至った。

<奄美群島と鹿児島大学>

2003年（平成15年）の奄美群島日本復帰50周年は全国各地で記念イベントが展開され、各界各分野の方々が地元奄美においていただき、イベント展開していただいた。

私の当時の記録には、鹿児島大学関係では公開講座「離島シンポジウム」（2月）、「あまみの空と海」講演会、大学院人文社会科学研究所公開講座（5月、6月、7月、8月、10月、12月）はじめ法文学部や医学部、全学プロジェクトなどのシンポジウムや公開講座を相次いで地元開催していただき、医学部保健学科離島地域看護学科実習生83名来島も記録されている。

この奄美群島日本復帰50周年記念イベントを契機に、奄美群島はそれまでに増して大学との地域連携の取組みがすすんでおり、いくつか列記してみる。

1つ目は、奄美群島広域事務組合が事業主体となって取り組んだ「奄美群島における有用海藻（ソゾノハナ）及び黒糖焼酎粕の活用調査」である。平成8年度以降、名瀬市の調査を皮切りに奄振事業による群島レベルの調査へと進展した調査で、鹿児島大学の水産学部、農学部、工学部の先生方に連携をお願いし、多大なるお力添えをいただいた。

現在は、研究成果をもとで奄美市の奄美産業クラスター推進協議会において上記の先生方の応援を引き続きお願いしてステップアップに取り組んでいる。

2つ目は、これも奄美群島広域事務組合が奄振事業を導入して取り組んでいる奄美ミュージアム構想の推進である。

これは、奄美群島全体を生きた博物館として見立てた新たな奄振計画の「自立的発展」への目玉であり、奄美群島の「宝」資源を保全しながら国民に活用してもらってより幸福になっていただくという取組みで、エコミュージアムの奄美版でもある。

具体的には、

- ① ポータルサイトの充実……国民が必要とする情報のストックと受発信体制の整備
- ② 人材育成……プログラマー、インストラクター、ガイドなど専門的人材の育成と、「私も奄美の案内人・学芸員」と銘打った、語り部のすそ野拡大等
- ③ 産業化……ワントウワンマーケティング等を駆使した、国民が奄美の「宝」資源との交流を通じて、より豊かな人生が送れるテーマ別目的型のモデルルートの開発・誘導、有償ボランティアやコーディネート団体等の受入体制整備など、「奄美ミュージアム」に求心力を与えた奄美の人づくり・モノづくり・まちづくりである。

このうち、大学と地域連携の関連では、

- ① 奄美学術フィールドの形成……奄美を研究フィールドとしている研究機関や研究者への情報提供、フィールドワークへの地元の協力体制、研究成果の普及等
- ② アイランドキャンパスの推進……大学のサテライト教室、ゼミ、論文作成などのフィールドワークの受入れ

【参考：鹿児島大学との連携推進事例】

- ・奄美での大学生・高校生交流（法文学部）
- ・大学院奄美サテライト教室（人文社会科学研究所）
- ・島嶼圏開発のグランドデザイン（法文学部中心の鹿児島大学プロジェクト）

- ・与論島のタラソセラピー（多島圏研究センター）
- ・離島の複式学級教育（教育学部）
- ・黒糖焼酎関係の共同開発（農学部）など

③ 大学・研究機関等との連携……鹿児島大学をはじめとする大学・研究機関等との連携による研究成果の効果的活用

などをうたい、取り組んでいる。この奄美ミュージアム構想は平成16年度に策定したが、鹿児島大学法文学部長（当時）山田誠先生に顧問をお願いし、助言・指導をいただき、感謝の至りである。

3つ目は、アイランドキャンパス（学生合宿誘致）の取組みである。奄美群島観光連盟は、「奄美アイランドセラピー」と題したテーマ別目的型観光パンフレットを平成16年度に作成、そのなかでアイランドキャンパスの項目を掲載し、近年の奄美への大学生等の調査・研究活動事例をまとめた。参考までに次の一覧を御覧いただきたい。

アイランドキャンパス（学生合宿）

市町村名	大学学部（サークル）名（順不同）
名瀬市	琉球大学法文学部考古学研究室（発掘調査）、東京女子大学（高倉調査）、鹿児島大学医学部（離島地域看護学実習）、名城大学国際学部観光産業学科、摂南大学大学院田中研究室
大和村	琉球大学法文学部（社会人類調査）、明治大学政治経済学部（社会人類調査）、武蔵野女子大学生生活総合デザイン学科（高倉実測調査）
宇検村	鹿児島大学水産学部（ヨシノボリの研究）
瀬戸内町	日本大学医学部（予防医学の普及）
住用村	九州大学（地質学調査）
笠利町	鹿児島大学医学部外（離島看護学実習、地域研究、博物館実習）、沖縄国際大学（卒論）、慶応大学（修論）、熊本大学文学部（発掘調査）、琉球大学（地学調査）
喜界町	鹿児島大学水産学部（インターンシップ事業）
伊仙町	鹿児島大学法文学部（発掘調査）、琉球大学法文学部（発掘調査）、早稲田大学無人島研究会、名城大学国際学部観光産業学科
和泊町	琉球大学（城跡調査）
知名町	岡山大学（洞窟探検）、鹿児島大学（洞窟探検）、東海大学（洞窟体験）、法政大学（洞窟探検）、九州大学（洞窟探検）、山口大学（洞窟探検）、高知大学（洞窟探検）、南山大学（文化人類学）、東京農業大学（農業体験）
与論町	名城大学国際学部（生涯学習調査）、志學館大学（生活習俗研究）、鹿児島大学医学部外（タラソセラピー、水産業の現状調査）、国土館大学工学部（タラソセラピー）、埼玉大学教育学部（南方型建築様式）
奄美全域	山口大学建築（卒論）、茨城大学（学期レポート）、佐賀大学海浜台地生物生産研究センター（奄振事業委託研究）、鹿児島大学水産学部（奄振事業委託研究）、鹿児島大学大学院奄美サテライト教室

（奄美群島観光連盟ホームページ「アイランドセラピー」参照）

このアイランドキャンパスの取組みは、鹿児島県離島振興協議会を軸に、県内離島の各地で推進している。

4つ目は、奄美長寿・子宝プロジェクトの取組みである。これも新奄振事業の目玉として県が事業主体となっていてすすめているもので、10万人当たり百歳以上が沖縄県の1.5倍、合計特殊出生率の全国自治体ベスト10に奄美の4～6自治体が入る要因を分析し、データ等を国民に提供し、国民が奄美の長寿・子宝資源と交流することでより幸福になってもらおうと、産業化に至るまでのプログラムだが、鹿児島大学医学部の分析作業等に依拠するところ多く、このプログラムのモデル事業実施中の瀬戸内町と与論町では、公開シンポジウムが大学等の主催で催された。

<奄美市の取組み>

奄美市では、近年、放送大学鹿児島学習センター外視聴室（奄美教室）が実現した。これは、初代所長の島田俊秀先生はじめ初代客員教授の皆村武一先生のご尽力絶大なるもの

のおかげであるが、おかげさまで現在94人（うち奄美市57人）の奄美の学生が奄美市のビデオ学習室等で学び、全国離島モデルとなっている。

次に、平成16年度からスタートした鹿児島大学大学院人文社会科学研究所奄美サテライト教室を昨年度（平成17年度）から3年間の文部省支援を得て本格始動していただき、これも全国離島モデルになるべく努力している。悩みは、学生数が7名と多くなく、私は、山田誠学部長（当時）や特任講師の井上晃男先生と奄美大島の全市町村や商工会議所関連事業所等への普及活動を行ったが、Q&Aで、「大学院に学ぶ効果は？」との問いに私は「即給料を上げるというわけにはいかないだろうが、学ぶ姿勢と集中力はトップも見ており、人事考課等で考慮されるでしょう。」とか、「これからは大学院で学んだ若者がゾロゾロ就職してくる時代になり、幹部職員や上司も今のうち大学院に学び自らの知的財産をパワーアップしておかないと、組織の維持・強化に妨げをきたす。」などとナマナマしい話もしているが、これも山田先生や井上先生との車中で色んな話を伺っているなかからヒントを得たもので、鹿大の先生方との車中談義は私の楽しみとなっている。

このサテライト教室の延長線上に、本年3月には奄美市－鹿児島大学間の包括連携協定書の調印式があり、永田行博学長もおいで下さって、地元行政や教育界だけでなく、産業、文化、医療、保健、福祉等の地元の各界が一堂に会し、鹿大の先生方との交流レセプションを行った。この取組みは徳之島にも連鎖し、奄美サテライト教室徳之島分室開設（平成19年度）の準備がスタートした。

また、奄美市においては、只今、奄美諸島における学術的な交流拠点「奄美諸島フィールド研究センター」（仮称）の整備を企図し、並行して奄美市の各プロジェクトを鹿児島大学との連携により開発すべく、国の各種支援

プロジェクトの導入に取り組んでいる。特に本年度は、内閣府の「地域雇用創出のための知の拠点再生推進方策検討調査」事業を導入し、「奄美の資源（自然、食、健康）の「ブランド化」による地域活性化」をテーマに、①花粉症避粉地としての効果②タラソセラピー（海洋療法）を活用した健康体験交流施設の効果効能③大島紬工程の未利用資源「セリシン」活用④2009年7月22日の皆既日食に向けた中継システム等構築⑤奄美の水の商品化可能性などの研究を、鹿大の9名の先生に依頼し、共同研究を行う。

併せて、経済産業省の「広域的新事業支援ネットワーク拠点重点強化事業」（平成17年度から継続）、九州経済産業局の「地域新生コンソーシアム研究開発事業」（本年度）において焼酎廃液を利用した化粧品化等に鹿大の先生方と共に産官学連携で取り組む。

さらに、奄美群島広域事務組合においても、鹿児島大学と奄美群島の各市町村が鹿児島大学との地域連携がすすむよう、国の各種支援プロジェクトの導入や包括連携協定の準備をすすめている。

<ドリーム・ア・ドリーム これから>

私は、これからの大学は大学生が日本のどこかの大学に所属するのではなく、学籍は世界のエントリーナンバー何番の学生となり、今日は鹿大キャンパス、明日は奄美サテライト教室、明後日はインドのニューデリー大学、次の日はパリ大学で学び、その都度学費を支払うシステムになる、と若い世代に言っている。学ぶ手段はキャンパス内やマルチメディアキャンパスなどさまざまだが、若い時代に集中して単位取得する学生と生涯かけて働いたり学んだりを繰り返して単位を取得していく学生との多様化がさらにすすむ、田中一村が2年間働いたお金で次の2年間絵を描いたように、また、税理士試験が生涯かけて一科目ずつ積み重ねられるように、である。

このような時代を想像しながら、大学と奄美との地域連携について、次のことを述べてみたい。

- ① 大学とコンサルタント企業の融合……消費者サイド（自治体や企業）から考えると、コンサルタント企業人材の多くは特定の企業人材として長く勤めているうちに頭脳硬直がすすみ、一方、本来自由で伸びやかな研究が可能な大学の教官も同じ大学内に閉ざされているため頭脳硬直化をきたし、消費者サイドはその双方を融合して相手にするとおもしろい開発が可能と思うけど、現状は別々に相手にしなければいけないジレンマにある。これを、プロジェクトごとに双方の融合化がすすみ、消費者サイドに有償サービス提供できる体制がすすむと、大学の研究成果がコンサル企業との連携により飛躍的に社会に開かれ、コーディネート力も発揮されやすくなると思うが、それぞれの事情でなかなか思うようにすすまない。
- ② テーマ別目的型のデータベース化作業を急ごう……ここ数年の鹿児島大学との連携で、奄美にとって大きな刺激となったのは鹿児島大学による「奄美ニューズレター」であった。2003年12月に第1号が発行され、現在はなんと26号まで続けられている。このニューズレターは、鹿児島大学全学総合プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザインー南西諸島における環境ガバナンス型地域政策」の成果を発表する目的で発刊された、と位置づけられており、内容は、萩野誠先生が編集責任者とあって、大学の先生方だけでなく、地元参加もあり、読み物としてもおもしろく、私の寄稿もこれで2度目であ

る。

私はそれまで大学のニューズレターなるものを目にしたことがなく、驚きと新たな発見で新鮮な出会いとなった。

地元ではこのニューズレターを200部いただき、市町村、議会、図書館はもとより、奄美ミュージアム人材育成事業の400人の受講生、奄美を訪れる研究者や学生、産業・文化などの業界団体等へ目的に合わせて、各種会合等で配付するなど、大切に活用させていただいている。時には高校生にも、鹿大のPRを兼ねてこのような冊子があると配ってみたいのだが、実行はこれからである。

今後は、せつかくの1～28号（これから発行されるもの含む。）のレポートをテーマ別目的型にデータベース化し、必要な人が必要なときに必要部分を体系的に活用できる仕組みをつくるのが奄美振興にとって肝要であり、この作業を鹿大との連携で、奄美ミュージアム事業等ですすめたい課題である。これは先行事例があり、昨年度の奄振事業で奄美の生物資源（今回は陸域のみ）をデータベース化し、産業界等で活用してもらうべく、奄美群島広域事務組合ホームページ等で公開された。

今後、奄美ニューズレターだけでなく、鹿大図書館や研究室等で個々に蓄積されている奄美関係の研究成果がデータベース化によって奄美振興に活用されるような仕組みをつくるのが奄美ミュージアムの生きた博物館としての機能発揮の目標であり、今後、デジタルミュージアム（アーカイブ）事業等の導入が考えられる。

- ③ 鹿大ニューズレター等の地元中・高校

生等への副読本活用……この2年間、世界自然遺産をめざす奄美の教育環境を整える一環として、奄美の多様な生物資源を育ててきた自然環境や社会環境を小・中学生向けにわかりやすく脚色した副読本が奄美群島重要生態系調査事業（環境省と県）で作成され、各学校へ配付された。このように、鹿児島大学の奄美ニューズレターなどのレポートを早い段階から中・高校生用にわかりやすく脚色したものが副読本として供されるよう、これも工夫の余地があるだろう。また、奄美市は、市町村合併を契機に光ファイバー網による地域イントラネット事業を導入し、行政と学校、地域との情報伝達や情報共有化のアップを図りつつあるが、奄美ニューズレター等もネットを通じて子どもたちや地域の目に触れられる機会を増やすチャンスでもある。

- ④ 国内各大学との連携……鹿児島大学以外の大学と奄美との地域連携の事例は、琉球大学や名桜大学はじめ沖縄の各大学と地元研究者との連携、宇検村と東北福祉大学、瀬戸内町と近畿大学、東京農業大学（包括連携協定）、東海大学、知名町と名山大学などの交流が進行中である。特に宇検村は東北福祉大学宇検村学習センターが設置され、宇検村体験交流センターもオープンした。これは全国の大学のゼミなどのアイランドキャンパスやIターン希望者、農業体験、体験型観光客などの多目的利用に供される施設で、自炊可能な宿泊棟やパソコン、ビデオ学習、専門図書など、受入整備が整えられている。

また、昨年8月、私は神戸大学経済経営研究所奄美経済コンファレンスの研究会で地元からの報告を行うべく、

山田誠先生と共に招かれたが、関西圏の大学で奄美研究に携わっておられる多くの先生や学生と触れ合う機会を得た。日頃は地元中心に奄美が回っているように思いがちだが、このように全国には多くの方々の目が奄美に注がれていることを実感し、意を強くしたものだ。これら全国の大学の奄美研究者のネットワーク体制の整備も課題である。

- ⑤ 鹿大と奄美をつなぐヒューマンウェア……以上の課題前進のためには、鹿大と地元をつなぐコーディネーター役の人材の有無が成否を左右する。私はかつて、「自由大学」と銘打って奄美で開催されたシンポジウムのパネラーとして、ブラジルの「美術館長」という肩書きで来島された30代の日系女性の話を聞く機会を得た。

美術館長との肩書きに、私は奄美パーク園長の宮崎 緑さんのような方かなあと思って話を聞いていたら、違った。

その女性はブラジルで消費者と生産者、つまり需要と供給のマッチング・コーディネーターする仕事で、それを自称「美術館長」と称し、仕事場は自宅です、というものだった。たとえば、ゆのみ茶わんをつくってもらいたいと言う消費者の好みや希望を聞いて、造り手に伝え、マッチングさせていく仕事だと言うのである。

私は、鹿大と奄美の関係も、この話と同じように、奄美の産業界や行政のナマの需要を大学側に伝え、大学側も組織としてそれを受け止め、パートナーとしての大学研究者を紹介し、商品開発や人材開発に実働していく、そのような、奄美と大学を結ぶ「美術館長」を必要とする時代に入ったと思

う。裏返して言えば、「美術館長」は鹿大の先生がどのような研究蓄積を持ち、地域貢献を考えているかという、大学側の情報を、地元と大学のマッチングを目的として地元伝えるという役目も負う。また、大学人材と地元人材の協働の役割も担う。

もちろん、奄美のパートナーは鹿大だけではないのだから、「美術館長」は、鹿大と全国の他の大学や研究者間を結ぶ人材ともなる。

これが奄美ミュージアム構想のうたう、地域と大学・研究機関との連携をすすめる人材育成なのである。本稿ではこの人材を「奄美ミュージアム美術館長」と名付けておこう。私もそのボランティア人材の一人として、これからも、鹿児島大学はじめ全国の奄美と関わる大学・研究機関とのヒューマンウェアの一人でありたい。

<おわりに>

去年12月には、鹿児島大学全学総合プロジェクトの集大成として稲盛会館に於いて矢野利明副学長がコーディネーターを務められて公開シンポジウムが開催された。私も分科会のパネリストとして奄美の観光と開発をテーマに事例発表させていただいた。この模様は、奄美ニューズレター No.26 に掲載されており、内容は割愛するが、大学の先生、学生、市民の参加で会場はいっぱいとなり、一日奄美デーとなった。有難く、この雰囲気をもどくように地元へ伝えようかと、興奮を覚えたものだった。

私はかつて、日本の離島の職員が海外の離島を見る、という日本離島センター主催の海外ツアーに参加して以来、国内はもとより、海外の離島の政策や課題を意識して考えるようになった。幸い、鹿児島大学は多島圏研究センターを有し、島嶼学会や日本離島セン

ターなどの諸活動の牽引役として求心力をもっておられ、おかげさまで近年奄美で2回も島嶼学会を開催していただいている。鹿大の多島圏研究センターは太平洋の島々の研究が多く蓄積されており、奄美にとって、このセンターへの期待は大なるものがある。

一方、わが国の成長産業と位置づけられているものの殆ど（健康、福祉、（民俗）医療、環境、観光等）はもともと奄美の得意芸としてきた分野である。これまでの大量生産・大量消費時代には活躍の幅が限られていたが、交通と情報の発達による、これからの多品種少量、多様な価値が共生していく時代にあっては、奄美の宝資源（奄美ミュージアム）が国民により多く提供され、それを味わうことによって国民がより豊かになれる時代に入った。奄美の出番である。

「人材が集まるところに産業は集まる。」と言われて久しいが、地元は、冒頭述べたように、鹿児島大学はじめ全国の大学の大学改革に学びつつ、大学と地域連携による奄美の振興にさらに頑張りたい。

去る7月4日は全国ふるさと市町村圏シンポジウムが奄美群島広域事務組合主催で地元開催され、スローライフと産業の組み合わせ造語「スローライフ産業」をテーマに奄美から全国へ情報発信された。奄美ミュージアム構想にこれまでご指導・ご支援いただいている鹿児島大学のさらなるご高配をお願い申し上げます。本稿を閉じます。

<追記>

今秋、11月には鹿児島大学全学プロジェクトによる世界自然遺産シンポの奄美開催、12月2日稲盛会館にて農学部シンポに私もシンポジストとして参加させていただく。さらに11月から教育学部大学院の奄美サテライト教室も開設される運びとなった。感謝！